

| Column |

ART & CULTURE around 芸術

パイプオルガンと 日々向き合って

interview

東京芸術劇場 オルガニスト **小林英之** さん 〈前編〉

オルガニストの小林英之さんは、高校生の頃、バッハの音楽に憧れてオルガンと出会ったという。

「オルガンは13～14世紀には、電気を使用する部分以外、現在と同じ仕組みのものが作られていました。現存する最古のオルガンは15世紀のもので、残されている曲の数も他の楽器に比べて圧倒的に多く、14世紀から楽譜が残っています」

1994年から東京芸術劇場の専属オルガニストを務めている。演奏するだけでなく、日々の楽器の状態を確認してパイプオルガンの“健康”を保つのも、小林さんの役割だ。

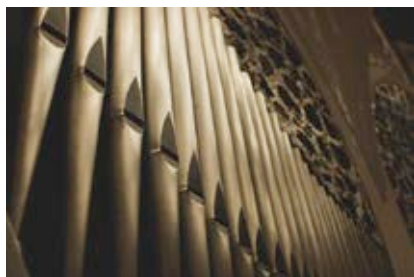
「パイプオルガンは風の楽器。湿度や乾燥で音の具合も変わる。いつも弾いていないと、閉め切った家のように傷みます」

東日本大震災直後の2011年4月から、2年をかけてパイプオルガンの大規模なメンテナンスが行われた。小林さんは3月31日に行われた改修前最後のコンサートが記憶に刻まれているという。「パイプは無事でしたが、飾りが落ちてしまった。その状態で演奏をしたんです。当時は世の中も異様な雰囲気、お客さん



のただならぬ熱気を感じました」

小林さんが企画し、定期開催されるパイプオルガンコンサートには、毎回700人以上のお客さんが詰めかける。「リピーターが多いのが嬉しいですね。パイプオルガンの複雑な魅力はすぐにはわかりませんから、くり返し足を運んでいただきたい。体全体が音に包まれる感覚を味わえます。日によって席の位置を変えて、響きの違いを楽しむのもおすすめです」



Kobayashi Hideyuki

東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院修了。ドイツ、フランクフルト音楽大学卒業。オーケストラでオルガン・パートを担当し、神奈川フィル、アンサンブル金沢、東京シティフィル、N響、新日フィル、東京都響の定期演奏会には、ソリストとして出演。また、東京芸術劇場をはじめ各地のホールでオルガン関連事業の企画を担当するほか、中学生、高校生あるいは一般愛好家を対象としたオルガンに関する啓発活動も積極的に行っている。現在、上野学園大学教授。

INFORMATION

今年、30周年を迎える東京芸術劇場は、劇場広報誌「芸術BUZZ」を、2020年4月・5月・6月分の31号より、新たな編集体制のもと、誌面をリニューアルしてお届けします。当初予定より今号の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

なお、次号の発行は2020年7月1日を予定しています。今後とも、より魅力的な劇場広報誌として、読者のみなさまのお役に立てますよう尽力する所存です。劇場広報誌への引き続きのご愛顧を何卒よろしくお願い致します。

〈鑑賞サポート〉について

東京芸術劇場では、一部の事業で、視覚・聴覚障害者のための舞台鑑賞サポートや託児サービス、各種割引、ヒアリンググループなどの〈鑑賞サポート〉を行っております。ぜひご利用ください。詳細 ▶ 劇場HP内「鑑賞のサポート」ページ
www.geigeki.jp/access/support.html

新型コロナウイルス感染症対応のため、掲載情報に変更ができる場合がございます。
最新情報は、東京芸術劇場や各主催者のHP等でご確認ください。